

《第 510 回(2024 年 2 月 8 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:9 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『ヤンネ、ぼくの友だち』 パーテル・ポール/作, ただの ただお/訳 徳間書店

2 月は『ヤンネ、ぼくの友だち』を読みました。スウェーデン在住の作家による文学作品です。1954 年 8 月 31 日、自転車に乗って突然現れた赤毛の少年ヤンネ。主人公のクリッレにとって、ヤンネはかけがえのない存在になっていきます。つらい結末へと向かう、思春期の少年たちの物語です。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●読みでがかった。最後はクリッレがかわいそう。そして、ヤンネに関しては謎ばかりで、最後まで読んでも多くの謎が残ったままだった。お母さんは知っていた？ミスター G.G.とサーカス団との関係は？など。後から考えると、欄干の上を歩いていたのも、サーカス団にいたからできたとわかる。少年ではなく、成長がとまっていたのか。

●良い本だが、つらい。女性蔑視、身分差別、児童虐待など様々な問題が書かれている。ヤンネとクリッレは友情というより初恋だったのでは。クリッレのお父さんは町の名士なのに、なんとかできなかつたのか。ヤンネは何をしたかだったんだろう。クリッレが社会を自分の目で見るようになるまでの成長の物語。

●つらく、心が痛くなるが、先へ先へとページをめくらせるのは作家の力。思春期特有の仲間意識ゆえにヤンネを救うことができなかつた。福祉国家スウェーデンでも子ども搾取、格差社会はあった。子どもと大人の境界線にある話。最後にもらうヤンネの写真がクリッレはどういう思いで受け取ったのか。

●長いと思ったが、途中から惹きつけられて読んだ。前歯がかけているヤンネ、親子の焼死など当時の社会問題に目が向けられている。それは、今の日本の少年少女にも重なる部分がある。社会の矛盾が描かれており、今はそれがより重くなっている。作者の視点が深いと思った。二人の友情という一本の線が通っている。

●物語の先に光が見えなくて読みづらかった。ヤンネとクリッレの気持ちは、男女に関係なく、恋・あこがれだったと思う。子ども搾取という言葉を意識しないで読むであろう子どもたちがどう感じるのかを知りたいと思った。誰に自分を投影して読むかで感じ方が違ってくる。いろいろなことを感じられる本。

●リンドグリーン作の『長くつ下のピッピ』はるかな国の兄弟』(岩波書店)が下敷きになっている。過去と現在を行き来する構成がすばらしい。クリッレが社会に出ていないために、気がつかない。対照的に、すべてをわかっているながら、クリッレに伝えないお母さんがすばらしい。良い本との出会いは、人生を豊かにする。

●面白く、楽しく読んだ。謎やスリリングな展開も楽しかった。いい終わりではないが、すべての子どもを助けられない現実がある。クリッレが「自分がきちんと見ていたらヤンネを助けられたのに」と思うのは、大人の考える助けるとは意味が違う。友だちを一人で死なせてしまったという後悔だと思ふ。子ども時代でしか持てない思い。

●冒頭から引き込まれた。警官の質問にクリッレが答えていくごとに深刻さが増し、悲劇的なラストが頭に浮かんだ。ヤンネの死を経験して大人になるクリッレが切ない。ときどき垣間見えるヤンネの本当の姿。大人が救いの手を差し伸べることはできなかったのか。クリッレに同調して読んだが、次はヤンネの心に寄り添って読みたい。

●つらい終わり方だったが、あまり暗く感じなかつたのは、クリッレたちのグループが思春期の少年らしく過ごしていたからか。クリッレの家で過ごすことで、知らなかつたことを知っていくヤンネは、どういう思いだったのだろう。クリッレの思い悩む姿に共感できる子どももいると思う。自分のいる環境を当たり前と思わないで欲しい。

次回 3 月 14 日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

☑ヨシタケ シンスケさんの作品を読みます。ご自身のおすすめの 1 冊をお持ちください。※申込み・参加費は不要です。